地域日本語教室における日本語教育実習：大学生の地域日本語教室での学び

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-03-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 樋口, 尊子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4849

地域日本語教室における日本語教育実習
―大学生の地域日本語教室での学び―

樋　口　尊　子

キーワード　日本語教育実習　大学生　地域日本語教室　日本語教員養成課程

1. はじめに

日本語教育実習には、①国内での実習と海外での実習、②日本語教育専門機関（大学や日本語学校等）とそれ以外、③通常のクラスでの実習と実習のために受講者を集めて行う実習、④対面と非対面（オンライン）といった形式がある。大学の日本語教員養成課程での日本語教育実習では、大学内に留学生への日本語教育が行われている場合は、自校での実習が可能であるが、ない場合は外部での実習を行わなければならない。依頼先を見つけ交渉し実習を受け入れてもらうことは容易ではなく、多くの大学での課題となっている。本学でも大学外での実習を行うため近隣の日本語学校等に実習生の受け入れを依頼している。多くの受け入れ先を確保していくことの困難がある一方で、卒業後、日本語教師を職業として目指す実習生は少ない。本学の日本語教育を専攻している学生は、「外国人の友だちに日本語を教えてほしいと頼まれたから日本語教育を勉強してみようと思った」「将来勤め先にいる外国人従業員に日本語を教えられればうれしい」「地域にいる子どもたちの日本語支援をしてみたい」「仕事にはできないがボランティアとして日本語教室で活躍したい」といったニーズを持っている学生もいる。そこで 2021 年度は「日本語教育実習 A」を留学生を対象とした日本語教育専門機関（日本語学校）で、「日本語教育実習 B」を地域で日本語を学ぶ人を対象とした地域日本語教室と小中学校での実習とし、日本語教育を学んでいるが日本語教師を目指さない学生が地域で活躍することができる実習を目指した。

本稿では、その地域日本語教室で行った日本語教育実習について①どのように実施したのか、②実習生はどんな気づきをし、何を学んだのかの 2 つに着目する。②については実習生の記した「見学ノート」「教壇実習後ノート」の記述とアンケート結果、振り返り（フィードバック）のコメントより考察する。なお、この実習は執筆中も継

続しており、本稿では中間地点までの内容を用いる。

実習生には、個人名が第三者に特定されることがないこと、参加は自由意志であり拒否における不利益はないこと、ならびに本研究の目的と内容を説明し口頭と書面にて同意を得た。

2. 地域日本語教室と日本語学校の実習内容の違い

2-1. 地域日本語教室とは

国内で日本語教育を行う機関には、大学等機関、法務省告知機関、地方公共団体・教育委員会、国際交流協会が行っているもの等がある。留学生は、大学等機関、法務省告知機関専門機関（日本語学校等）で日本語を専門的に学ぶ。しかし、そうではない就労や家族滞在、日本人の配偶者等、地域に暮らす外国人の日本語教育を担っているのが、地域日本語教室である。地域日本語教室は、その運営機関や運営方法はさまざまであるが、多くはボランティアによって支えられてきている。文化庁「令和2年度日本語教育実態調査報告書」によると、ボランティアは2万人を超えており、日本語教師（常勤・非常勤）の数よりも多い。

今回の実習先である地域日本語教室は、技能実習生を含む就労者が中心の教室である。技能実習生や就労者が必要としている日本語は留学生とは異なる。日本語を用いて人間関係を構築したり、仕事をこなすことが重要であり、文法・文型の正確性より、職場や生活において使える日本語を必要としている。また就労者の家族やその他、日本人の配偶者など長期間日本に暮らしている人も参加している。日本語の勉強をしたいと思って参加している人もいれば、交流を楽しみたい、新しい情報を知りたい、日本語で話したいなど、教室に参加する理由もさまざまである。この教室では、このように教室に通う人たちを「学習者」、そこに参加しサポートする人を「ボランティア」と呼んでいる。

教室での学習方法は、毎週、1名が「コーディネーター」として活動の内容の決定と進行を行っている。コーディネーターは始めに話題提供、情報提供等を行い、グループ活動とまとめの発表などのコーディネートをしている。この役目を実習生が教壇実習として担った。学習内容については、決まったテキストやカリキュラムはない。そのため、実習生は、教室見学で学習者の背景やニーズを把握、調査し自身で学習内容を考えていくことが求められた。

2-2. 日本語学校との違い

日本語教育専門機関で留学生に対して行う日本語教育実習と地域日本語教室での日本語教育実習にはどのような違いがあるだろうか。本学では前述の通り、日本語教育専門機関（日本語学校）においても実習を行っている。では、今回の地域日本語教室

との違いはどのようなものであるか。本学における、日本語教育実習の受け入れ機関に関しての相違点をまとめてみる。

日本語学校	地域日本語教室
学習者は留学生（学生）	学習者は技能実習生や就労者、家族滞在者等
学生が専門的に日本語を学んでいる	学習者が地域で暮らすのに必要な日本語等を学んでいる
学生は学費を支払い学校に通っている	学習者は登録費（半年 1000 円）のみ支払っている
授業に出席することが求められる	教室への参加は自由意志
主に進学を目標に学んでいる 試験対策等が行われている	目的はさまざまで日本語以外の学びも多い
クラスが固定されている （一クラス 20 人まで）	当日にならないと参加者がわからない
日本語能力別や目的別のクラス構成になっている	日本語能力も学習歴も異なる学習者が混在している
日本語教師（有資格者）が授業を担当している	日本語ボランティアが活動している
担当教員から指導が得られる	指導は得られない
カリキュラムがある	カリキュラムがない
指定されたテキストが使用されている	指定されたテキストがない
教師（実習生）がクラスの教壇に立ち、一人で授業を行う	コーディネーターが前に立ち、クラス学習・グループ学習のコーディネートを行う（各グループにボランティアがいる）

以上のような差があるため、日本語学校と同じ実習内容は不可能である。そこで、今回の教育実習には、自ら学習者の背景やニーズを把握、調査し自身で学習内容を決め行うことができる点に注目し、地域日本語教室に合った学習を作り上げ、コーディネートできることに最も期待した。それを行うためには学習者の継続的参加が望ましいが、参加が自由であるため毎週必ず学習者が全員参加するわけではない。また当日突然新しく参加する学習者もいる。学習者の日本語能力も大きく異なるという点が実習内容の決定から指導するのに難しい点であった。また、新型コロナウイルス感染症の影響で日本への入国が厳しく制限されているため地域日本語教室に参加している学習者は例年より少なく、入国直後という学習者もいない。今回の日本語教育実習では、日本滞在歴が比較的長く、日本語能力も高めである、イレギュラーなものになっていることを補足しておく。

3. 日本語教育実習の在り方

3-1. 日本語教師の資格の位置付け

文化庁「日本語教師の資格の在り方について（報告）」では、「生活者 としての外国人」に対する地域の日本語教育においても専門性を有する日本語教師の確保が必要であると明記され、日本語教師の資格の位置付けでは、「留学生」のほかに「生活者としての外国人」「難民等」「就労を希望する在留外国人」「日本語が必要な児童生徒等」および「海外における日本語教育」という 6 つの活動分野が提示された。また、日本語教育実習については以下のように記されている。

教育実習の時間数は，最低基準を示すこととする。1 単位時間は 45 分以上とする。教壇実習については，大学及び文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関が 設定した機関・団体で実施することとし，海外における教壇実習も認めることとする。教育実習実施機関は，留学生に加え，「生活者としての外国人」や就労者，児童生徒等，海外など，日本語教師の活動分野となる多様な教育実習現場を設定するよう努めることとする。

指導項目については①オリエンテーション、②授業見学、③授業準備、④模擬授業、⑤教壇実習、⑥教育実習全体の振り返りを行うよう記されている。

3-2. 資質能力

日本語学習支援者に望まれる「知識・技能・態度」の資質・能力についても表 8 で提示されている。本学では「知識」については、教育実習までに受講を必修としている「日本語教育学演習」で指導を終えている。よって、実習中には「技能」と「態度」について学ぶ機会となることを意識した。

「技能」は以下の 4 つである。

(1) 分かりやすく伝えるために、学習者に合わせて自身の日本語を調整することができる。

(2) 学習者の発話を促すために、耳を傾けると共に自身の発話を調整することができる。

(3) 日本語教育コーディネーターや日本語教師とともに、日本語学習者を支援することができる

(4) 学習者の状況を観察し、日本語教師や日本語教育コーディネーターの助言を得ながら、学習方法や学習内容を学習者に合わせて工夫することができる。

「態度」には以下の 5 つが示されている。

(1) 学習者の背景や現状を理解しようとする。

(2) 学習者の言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする。
(3) 学習者や支援者などと良好な対人関係を築こうとする。
(4) 学習者が自ら学ぶ力を育み、その学びに寄り添おうとする。
(5) 異なる考えた価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持とうとする。

これらを実習生が実習を通してどのように体験し実践できたのか、できなかったのかを5章で言及する。

4. 実習の内容

4-1. 実習の概要

実習を実施したのは2021年10月31日〜2022年2月6日までの毎週日曜日の午前10時から11時半までの90分間で、実習生は7名（3・4回生）が参加した。本学では国際英語学科の学生が主にこの日本語教育実習に参加するが、他学科でも受講可能であり、今回のこの実習でも6名が国際英語学科、1名が他学科の学生である。1名あたり5回以上の教室参加と教壇実習を参加条件とした。学習者の参加は、対面では5〜10名程度、オンラインでは平均3〜4名程で、オンラインへの参加者は対面より少なかった。ボランティアは対面もオンラインも8〜10名程度が参加していた。1グループあたり、実習生、学習者、ボランティアがそれぞれ1〜2名で、対面では5〜6グループ、オンラインでは3〜4グループ程に分かれてのグループ活動となった。この教室は貸し教室を利用しており、教室の予約が取れない場合はオンライン（Zoom）での学習を行っている。そのため、教壇実習（実習生が前に立ってコーディネートを行う）は、一人につき対面が1回とオンラインが1回から2回を担当した。対面は一人ずつ、オンラインはグループで担当した。

指導項目については文化庁「日本語教師の資格の在り方について（報告）」で示された①オリエンテーション、②授業見学、③授業準備、④模擬授業、⑤教壇実習、⑥教育実習全体の振り返りに従って計画した。

まず学内において教育実習の内容と実習先の団体について事前指導を行った。その後、見学へ赴きその際、教室にて担当者から教室でのルールや実習中の注意事項、教室で活動する人への紹介などを含むオリエンテーションが実施された。これは事前に地域日本語教室の担当者へ依頼しておいた。見学での内容は学習者のニーズを調査できるような内容になっており、そこから大学内にて授業準備と模擬授業を行い、教壇実習へ臨んだ。授業準備では、実習生がまず活動の目的、目標を明確にした素案を作成し、それを確認、修正を行った。そこから教案の作成、教材教具の準備、模擬授業までを一人ずつ指導した。教壇実習後は自己評価を記録させ、フィードバックを含む実習の振り返りを行った。フィードバックには教壇実習日に参加した他の実習生も加わり、それぞれが感じたことや改善すべき点を伝え合った。

4-2. ニーズ調査

日本語教育実習開始前に見学を行った。その際、「一日の生活」「生活で困ること」と言った内容の活動を通して、学習者の生活の様子、日本語学習の目的や学びたいと思っていることなどを聞くチャンスを得た。そこでニーズやレディネスなどを探り、教壇実習で行う学習内容を考える情報を収集した。実習生たちの気づきには以下のようなものがあった。(見学後に書いたレポートより抜粋)

【日本語学習者の生活の様子】
・仕事や子育て、家事の合間に日本語を勉強している
・日本で働いているが、職場では日本語を話す必要がない
・人と会話する機会がほしいので教室に通っている
・携帯で検索すれば何でもできる(電車の乗り方等には困っていない)

【日本語学習者の困りごと】
・速いスピードの日本語を聞き取るのが苦手
・ニュースの日本語は単語が難しいので分かりづらい
・会社での敬語、受け身、使役などの文法に苦戦している
・新聞もフリガナがないので読めない部分が多い
・読み方がわかる漢字も、書くとなるとわからないことがある

【日本語の学習方法】
・独り言を話して日本語を練習している
・毎晩 Youtube を見て日本語を勉強している
・わからない単語が出てくると意味を聞いてノートにメモしている

その他、「平日は朝起きてから1時間日本語の勉強をし、夜仕事から帰ってきたらまた2時間ほど勉強する」「毎日友だちと二時間自主勉強している」など学習者の学習に取り組む姿勢も知ることができた。

また、見学ではボランティアと一緒に活動に参加したことによって、以下のような気づきも見られた。

・会話をする中で話が膨らむように積極的に質問をしていた
・日本語特有の言い回しや難しい言葉は避けるべきだと思った
・一つ一つ丁寧にゆっくり話すこと、学習者がたくさん話す環境づくりが大切
・ボランティアのアドバイスと学習者が知りたいことに違いがあるかもしれない

このように、今後の自身の実習に活かそうとするコメントが見られた。

4-3. 教壇実習の学習内容

見学後、各自教壇実習で扱うテーマの選定を行った。その際、地域日本語教室や生活者としての外国人を意識して作られた『生活者としての外国人向け　私らしく暮らすための日本語ワークブック』や、国際交流基金の『いろどり 生活の日本語』、その他ウェブサイト等、参考にできるものがあれば利用するよう促した。

実際に実習生が行った内容の一例は以下の通りである。

活動テーマ	目標
地震災害について知る	①震度、地震の大きさについて理解する ②緊急地震速報を聞き取ることができる ③南海トラフ地震について知ることができる ④地震発生時に役立つアプリを知ることができる
町にあるお店について話す	①基本的なお店の名前を知る ②新しい便利な情報を知る ③住んでいる地域について理解を深める
年賀状を書く	①日本人にとって年賀状はどのようなものか知ることができる ②はがきの送り方を知ることができる ③話し言葉と書き言葉の違いを理解することができる
正月の過ごし方について話す	①家族関係の語彙を理解する ②正月にすることを知る
好きなこと好きな物を紹介する	自己紹介をするときに自分の趣味、嗜好を紹介し、人脈を広げることができる

活動テーマ「地震災害について知る」は、前述の『いろどり 生活の日本語』を、「好きなこと好きな物を紹介する」は、『生活者としての外国人向け　私らしく暮らすための日本語ワークブック』を「年賀状を書く」は文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラムで過去に作成された学習教材を参考にしている。

学習内容には大きく三つのタイプがあると考える。一つは〈情報提供〉で学習者が知らない知識や日本語や情報を紹介するインプット型である。二つは〈会話交流〉で、テーマに沿って会話を中心に学習者が自身のことを話す機会の多いアウトプット型である。三つは、作品づくりなど何かを完成させる〈活動〉である。テーマ「地震災害について知る」は〈情報提供〉で、コーディネーターである実習生が一方的に話す場面が多かった。災害時に役立つ多言語アプリの紹介などの情報提供も積極的に行った。それに対し「町にあるお店について話す」は〈会話交流〉をメインに、実習生は語彙

の導入・確認後、グループ活動の内容を伝えるのみに留まり、グループでの会話を中心にした。また、「年賀状を書く」は、もちろん〈情報提供〉も行ったが、後半は実際に年賀状を書く作業を行っており〈活動〉を伴うものであった。このように、それぞれ〈情報提供〉〈会話交流〉〈活動〉のいずれかをメインに他のものを織り交ぜた学習内容に仕上げていった。

仕上げていく過程での指導で気を付けたことは、ニーズ調査を行ったことを反映し、学習者目線で内容を考えた上で、目標をきちんと立てられているかということである。実習生の第一案には「地震のこと」「手紙の書き方」「温泉などの日本文化」を伝えたい、知ってほしいということばで表現され、「○○を教えたい」という傾向が多く見られた。地震など命に関わる情報は大切であるが、日本文化については教授者の一方的な押し付けにならないよう注意を促した。地震の情報も母語で簡単に得られる表面的な情報に留まらず、地域日本語教室でボランティアと一緒だからこそ学ぶことができる内容を考えることを意識させた。

日本の文化的な情報を伝えようとする傾向が強く、生活ですぐに役立つようなテーマを考えることは難しかったのは、実習生が大学にて専門的に外国語教育を受けていること、海外に渡り外国人として生活を経験したしていないことが影響しているかもしれない。新型コロナウイルス感染症の影響で留学ができなかったことも一因となったのではないだろうか。

5. 実習生の学び

5-1. 見学での気づきと学び

実習生は自分が参加した教室活動について毎回「見学ノート」を記入することになっている。見学ノートには活動内容をメモし、活動に参加した意見や感想を記している。以下、実習生の見学ノートに現れた意見、感想をカテゴリーに分けてみた。

【学習者の背景に対する気づき】
・（学習者Aさんは）職場では日本語を全く使わない。
・（学習者Bさんは）働く際の日本語で特に敬語が難しい。
　尊敬語、謙譲語、丁寧語を勉強しているが、とても難しい。
・話すことはできても、書くことが難しい人が多い。
・病院や市役所で困ることが多い。難しい言葉が多いから。
・災害時の日本語が難しいことがわかった。（災害時こそ全員が状況を理解できなければならない。できるだけ簡単なことばを使い、短い文章でいうことができればもう少し理解しやすくなると思った。）
・病院ではやはり困ったことが多い。自分の症状を医者に伝えたり、言っていることを理解することが難しいそうだ。（命に関わることなので、何かいい案があればよいと思う。）

・日本でスキーができるのは北海道だけだと思っていたそうだ。
・学習者の国では地震がない／地震の経験がない。
・お風呂に入る習慣がない（お風呂の入り方を知らないのに驚いた）。
・美容室に行ったことがない人が多い。
・ベトナム語にも「明けましておめでとうございます」という言葉がある。
・ベトナムでは文字を書くのに黒はよくない色で、赤字で名前を書いていた。
・日本の餅の食べ方を知らなかった（火を通さずにそのまま食べていたため硬くてまずいと思っていた）。

学習者がどのように生活で日本語を使用しているか、どのような日本語が難しいのか等、生の声を聞くことができた。さらに、これからどのような社会になっていくことが望ましいのかを考える機会ともなった。また、学習者の国の文化や考え方、日本での当たり前が当たり前でないことへの気づきも見られ、日本語教育の観点だけではなく、異文化理解の面でも学びになったと思われる。

【日本語教育に対する気づき】
・学習した内容にわからない漢字があったので日本語をしっかり知っておくこくことが大切だと思った。
・（自分自身に）いろいろな経験があるほど、もっと興味を惹かせるような話ができたと思う。
・「歯科医院に行く」ではなく「歯医者に行く」というのはなぜかと質問され悩んだ。帰宅してから調べてみた。

教壇実習ではなく活動への参加からも気づきや学びを得られたようである。日本語教育に限らない、実習生の今後の行動や考えに影響を与えたかもしれない。

次に、「見学ノート」の中で多く見られたことばについて一例を取り上げる。

「楽しい／面白い」「盛り上がった」
・話す内容（テーマ）が面白かった。
　話しやすい内容で時間が足りないくらい盛り上がった。
・学習者の旅行に行った話で盛り上がった。

学習者としっかりと日本語でコミュニケーションが取れたこと（語彙コントロール、やさしい日本語の使用ができた）、グループで話すことが楽しかったことが伺える。上記の【学習者の背景に対する気づき】にあげたように、初めて知ることが多く、驚きと発見があったことも楽しかった要因の一つであると予想される。日本語教育専門機関で日本語教師が行う日本語の授業を見学するのとは大きくことなる経験である。

「参考になった」「良かった」
・ボランティアの方が疑問形で問いかけて質問をされ、またそこから話が広がっていったので参考になった。
・実習生Aさんが、(グループ活動の際)すべてのグループに寄り添って話しかけているのが参考になった。
・実習生Bさんは説明をするだけではなく、クイズを取り入れ参加型を意識されていて参考になった。
・(実習生Cさんが)地震という言葉を使うとき、手を使って地震の揺れを表していた。視覚的にも分かりやすく良いと思った。
・実習生Dさんのプリントの内容は難しかったので難易度を下げればよかった。導入部分に少し説明があるとわかりやすかった。
・(実習生Eさんの内容に対し)答えがあるものと自由に話してもらうものがあり良かった。グループの様子を見て時間調節していたところもとても参考になった。
・どんな授業形態にするか内容をしっかり考えるのに骨組みを固めていくことが大事ということが参考になった。
・学習者の困りごとは自分の授業を作る時に参考になりそう。
・学習者Cさんがホテルや飲食店で働きたいため試験を受ける話を聞いて、私も4月からホテルで働くので参考になった。

一緒に活動しているボランティアから、またその日コーディネーターを担当している実習生の様子から多くのことを学び取っているようである。ただ参加しているだけではなく、このように他の実習生から学ぶことができたのは良かった。教室参加した後、コーディネーターであった実習生に対し、参加した実習生が良かった点と改善すべき点を毎回伝えるようにしていたため、そういった視線でしっかりと観察できていたのかもしれない。

その他、学びにつながったと思われる記述をあげる。例えば、「動画を見て日本語を勉強し、わからないところは日本人の友だちに聞く。それを毎日30分続けていると聞いて継続力がすごいと思った。」「(学習者の)一日のルーティーンを聞くと刺激を受けた。」などのコメントもあり、実習生自身の外国語学習や生活スタイルに刺激を与えることもあったようである。

また、グループ活動では「グループにさまざまな年代の人がいて、その人の年齢によって経験値も違うので、たくさんの話を聞いたり質問したりすることができた」「ボランティアさんとのギャップを感じた」等、異年齢の人との関りからの学びや気づきもあったようだ。特に、地震の経験を話すときや、地域の情報等は大学生よりもボランティアのほうが経験豊富で、同じ地域に住んでいるため、より学習者に役立つ内容が話せたという感想も多く聞かれた。

さらに、日本語学習の枠を超えた学びも見られた。

・学習者の二人から「大学で一番大変なのは最後の年です」と話してもらった。
・子育てをされている学習者、ボランティアが小さい子どもを地震から守るための策を話し合っていて、自分も親になった時に役に立つと思った。
・学習者Dさんは日本で子育てをされた経験があり、就職活動のアドバイス等ももらった。息子の就活の話をし、私たちの就活の話を聞いてくれた。本当にお母さんみたいだった。
・学習者Dさんに台湾のおすすめの温泉や、足つぼマッサージで有名なところなどを教えてもらって、台湾に行ってみたいと思った。

今回の地域日本語教室の実習では、実習生が最も年齢が低く社会経験がない。そんな実習生に対して、学習者もボランティアも理解を示し、受け入れ、やさしく接してもらえたことは大変有難く、貴重な経験である。日本語教育実習ではあるものの、それ以上に人と出会い、話をすることで学べることが多かった。

5-2. 教壇実習からの学び

実習生が教壇実習後に記した「教壇実習後ノート」に以下のような記述が見られた。

【難しかったこと】
・日本語能力があまり高くない人と会話するとき、聞き取れないときにどう聞き返せば傷つかないないだろう、少し筋違いな回答が返ってきた場合訂正すべきかなど。
・質問を投げかけ反応があまりよくなかった場合の切り返しがむずかしかった。
・質問をして返ってきた答えに上手く答えることが難しかった
・誰も手を上げない時のフォローが難しかった。
・学習者へ投げかける言葉遣いはこれでおかしくないか。
・時間配分、臨機応変に進めることも必要だった。
・板書の書き方
・プリントを配布した後、その進め方について指示をするのが難しかった。
・時間設定と学習者の行動、教師の活動・板書を合わせるのが難しかった。

【改善すべき点】
・学習者に回答を求める際、名前で呼びかければよかった。
・答えを間違ってもよい雰囲気づくりができなかった。
・教案の大切なところにマーカーでチェックしていたのに言い忘れてしまった。
・教壇実習前に何度も模擬授業をするべきだった。

【評価できる点】
・時間もセリフもおおよそ教案通りに進めることができた。

・あの例文を作って良かったと感じることができた。
・発表してもらっているときは相槌を入れてなるべく話しやすくした。

【感想】
・いざ前に立つと緊張してしまい、それで教室の雰囲気も硬くなってしまった。
・ボランティアさんから言葉の使い方についての指摘や話し方のアドバイスなどをもらった、自分が思いつかなかった内容に気づくことができた。
・Zoomだからこそできることがあると思った。最大限に利用して次回も頑張りたい。

時間配分や板書、教室の雰囲気づくり、教壇実習に至るまでの準備、当日の緊張感、教案に書き込んだ内容を忘れてしまうなど、留学生に対する教育実習で見られるコメントに類似している。日本語教師に指導を行ってもらえない環境ではあったが、ボランティアが参加していることで、指導教員以外の意見を聞くこともできた。

5-3. 資質能力に対する自己評価

日本語教育実習の折り返し時点で中間アンケートを行った。問1では文化庁「日本語教師の資格の在り方について（報告）」の日本語学習支援者に望まれる「知識・技能・態度」の「技能」についての自己評価を尋ねた。質問は各項目を「〜できましたか」と問いにし「できた」「まあまあできた」「あまりできなかった」「全然できなかった」の4段階での回答を求めた。実習生7名の回答は以下の通りである。

「技能」	できた	まあまあできた	あまりできなかった	全然できなかった
（1）分かりやすく伝えるために、学習者に合わせて自身の日本語を調整することができる。	2	4	1	0
（2）学習者の発話を促すために、耳を傾けると共に自身の発話を調整することができる。	3	3	1	0
（3）日本語教育コーディネーターや日本語教師とともに、日本語学習者を支援することができる	3	3	1	0
（4）学習者の状況を観察し、日本語教師や日本語教育コーディネーターの助言を得ながら、学習方法や学習内容を学習者に合わせて工夫することができる。	2	5	0	0

問2は、同じく「態度」についても質問し、「した」「あまりしなかった「全然しなかった」の3段階での回答を求めた。

「態度」	した	あまりしなかった	全然しなかった
（1）学習者の背景や現状を理解しようとする。	6	1	0
（2）学習者の言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする。	7	0	0
（3）学習者や支援者などと良好な対人関係を築こうとする。	7	0	0
（4）学習者が自ら学ぶ力を育み、その学びに寄り添おうとする。	7	0	0
（5）異なる考えた価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持とうとする。	7	0	0

問3では「この日本語教育実習でどんなことを学ぶことができていると思うか」という問いに対し自由回答を求めた。

・どう教えるべきかなどを考え、準備することの重要性。
・母語を教える難しさ。
・学習者は（日本語を）学びに来ているだけではなく、交流をしたい目的できている人が多いこと。／どんなことを学びたいかを学べた。
・実際に学習者さんとふれあい、授業を組み、教壇で授業をやってみることで、体験してみないと分からないことや、自分の足りていない点を見つけることができた。
・それぞれの学習者にあった話し方やスピードで話すにはどうすればいいか、個々で耳型、目型なども違うので、分からないときにどんな風に説明したらいいのか。
・異文化理解や1人1人に寄り添った日本語支援がとても必要だと学んだ。
・どれだけ一人一人に寄り添えるかを意識した。その中で、それぞれの今までの背景やこれからの目標に寄り添った日本語の伝え方を学ぶことができた。

問4では「この日本語教育実習があなたの将来にどのように役立つと思うか」について自由記述で回答を求めた。

・シンプルでわかりやすく伝える方法とやさしい日本語を学んだので、将来どんな仕事に就いても活かすことが出来ると思う。
・以前よりも自信をもって立ち、人に発信力をもって伝えることが出来ると思う。
・日本で働く外国人や、暮らす外国人の理解。

・日本語教師として授業を担当できると思う。
・一般企業に就職したとしても、周りにいるかもしれない外国人労働者と良好な関係を築けると思う。
・街中で困っていたら助けることもしやすくなると思う。
・就職して、もし会社に外国人労働者がいて日本語を教えることになったときに役立つと思う。例えば、個々でレベルが違う学習者にどんなアプローチをかけていけば良いのか、1回言って伝わらなかったときにどのように言い換えたら伝わるのか等、この実習の経験を活かしていけると思う。
・今後多様な異文化の中で生活していく機会がある中で、この経験から異文化を理解、相手を尊重する姿勢や社会に出ていく中で日本語の学びを必要とする人の少しかもしれないが手助けができると思う。

問1の「技能」について、「全然できなかった」という回答はなかったが、まだあまりできなかったと感じるものもあるようだ。これは中間アンケートであるため、もう一度、日本語教育実習終了後に同じ内容を問うつもりである。それらの評価があがるように引き続き指導していこうと思う。問2の「態度」に関しては、一名を除き「した」と回答した。さらに理解を深め良好な関係づくりとなるようサポートしていきたい。問3では、日本語教育に関する内容、地域日本語教室や支援方法についての記述が見られた。問4では、自分自身の行動に役立つというコメントに留まらず、手助けできるといった相手への行動に役立つと回答したことが印象的だった。全体的には、今回期待していた地域に暮らす日本語学習者のことを知り、それに合わせた学習内容を考え実施するという一連のことが学べたと評価できる。

6. さいごに

この実習が始まった当初、教壇実習の指導する際に「ボランティアの反応が怖い」と複数名の実習生から申し出があった。教壇実習後も「実習中ボランティアの顔色を窺ってしまうことがあった」「学習者よりもボランティアの反応のほうが怖いと感じた」「わかりにくいなど指摘が来るのではないか心配だった」「自分が話したことが通じたかどうか気になる」というコメントも寄せられた。これは初回の教壇実習時に特定のボランティアから多くの意見をもらったことがきっかけだったようである。実習生から見れば、祖父祖母の年齢であるボランティアとの接し方は学習者よりも難しいことだったのかもしれない。

実習生、学習者、ボランティアの3者のかかわりについては以下のような共通点があるように思われた。

〈学習者と実習生〉

・年齢が近くジェネレーションギャップが少ない。

〈学習者とボランティア〉
・同じ地域に暮らしている
〈ボランティアと実習生〉
・日本語ネイティブで日本のことを知っている（しかし、知っている内容は異なる）

ボランティアは実習生よりも年齢が高く人生経験が豊富であるため、各回のテーマについて多くの知識を知っており、学習者だけでなく実習生にとっても学びになったことも多かった。例えば、実習生が経験していない阪神淡路大震災についてや旅行先の情報等、大学生では答えられないものが多かった。この点では、大学で学習者を募り開催した教室、留学生を対象とした学校では学べないことであっただろう。ここに地域日本語教室に参加する意義があると感じられた。その他、団体の管理者とのやり取りをすることも社会に出てから役立つスキルの一つであったと考える。

全体をふりかえると、この地域日本語教室での日本語教育実習では、教案作成や教壇に立つ等、留学生を対象とした実習と類似した経験も行うことができた。さらに、授業で教科書を通して学んだ日本に暮らす外国人（日本語学習者）を目の前に、彼らの求めることを知り、どのような生活を送っているのかも知ることができた。同じ職場で働く日本人従業員でも知らないことを実習生はたくさん知ることができたのかもしれない。ここで学んだ実習生たちが今後、地域に暮らす外国人にとって理解者となることを期待する。

参考文献

亀田千里・金久保紀子（2003）「日本語教育実習の改善を目指して」筑波女子大学紀要（第 7 集）pp. 105−113

坂本勝信・谷誠司・山下浩一・内山夕輝・川口美緒（2021）「地域日本語教育における学習者と大学生のオンライン会話練習の試み」常葉大学外国語学部紀要（第 37 号）pp. 131−152

佐々木香代子（2021）「オンラインによる日本語教育実習」琉球大学国際教育センター紀要（第 5 号）pp. 29−37

備前徹・三枝令子（2019）「専修大学における日本語教育実習の新たな展開に向けて」専修人文論集（104 号）pp. 225−242

深江新太郎（2021）『生活者としての外国人向け　私らしく暮らすための日本語ワークブック』アルク

参考ウェブサイト

国際交流基金『いろどり　生活の日本語』
https://www.irodori.jpf.go.jp/index.html（最終アクセス日：2022 年 1 月 10 日）

文化庁「日本語教師の資格の在り方について」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/92083701_01.pd（最終アクセス日：2022 年 1 月 10 日）
文化庁「令和 2 年度国内の日本語教育の概要」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r02/（最終アクセス日：2022 年 1 月 10 日）
文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラム
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/index.html（最終アクセス日：2022 年 1 月 10 日）